

英米文化の背景

「英米人の迷信・俗信」考 (4) II 死

— その3 出棺・葬列行進・教会ミサ

藤 高 邦 宏

倉敷芸術科学大学教養学部

(1995年9月30日 受理)

はじめに

いかなる人も死を免れることはできない。死者が出ると、人々は死者の来世の平安を願い、その独自の方法で死者を手厚く葬る儀式を行おうと努めて来た。遙遠の太古より、いずれの文化においても、人々のこの努力は最大限懸命なものであったはずである。

かつてアイルランドやスコットランド高地地方では、「教会墓地の入り口付近で、二つの葬列が遭遇したとき、それぞれの会葬者は自分たちの死者を先に埋葬しようとして、墓地への入場順を争い、時には殴り合いの騒ぎが起きた」¹⁾と言われる。この理由は、自分たちの死者の埋葬が相手方の死者よりも後になると、死者に死神のような「墓守」という辛い役目を負わせねばならなかったからである[本文の7で詳述]。この一例からも窺われるように、人々は死者の来世の幸福のために、まさに「懸命な努力を惜しまない」のである。

当シリーズの今回は、「出棺」から「葬列行進」「教会ミサ」に至るまでの、英米人の古今の「習慣」のあらましと共に、そこに見出される多様な「迷信・俗信」を考察する。またその際に、いくつかの事項については、若干の議論をも試みたいものである。

1 出 棺

棺が教会あるいは墓地に運ばれるとき、棺台や霊柩車が使われる。かつてはこうした運搬具も教区の共有物であったが、現在では多くの場合、葬儀屋によって手配される。

出棺については、次のようなことが言われる。

* 「棺は死者の足部から先に、玄関もしくは正面の窓等を通して外に運び出されなければならない。運搬中も足部が先に行かねばならない。」この習慣は、今日においても大いに守られていると見做してよい。

この「足部から先に」の習慣の謂れについては、次のような多様な見解がある。

The human being comes into life head first and must therefore leave the other way [feet first]. (P. Lorie)²⁾

人は頭から先に誕生する故に、逆さまに〔足から先に〕去って行(逝)かねばならない。

… a custom which was doubtless originally meant to discourage the spirit from returning to the house : … (C. Kightly)³⁾

… 明らかに、もとは死者の霊が家に舞い戻れないようにと意図された習慣。…

… otherwise, looking back, it [the corpse] would beckon one of the family to follow it in death. (C. F. Potter)⁴⁾

… さもないと、死者が振り向いて、家族の一人を死出の旅についてくるようにと手招きするであろう。

「足部が先に」という習慣は、世界の多くの葬儀文化の中で見られる習慣のようである。根底的には、Lorieの言う「死は誕生の逆さま」説が確かにあるであろう。KightlyとPotterの両説についてはいずれも甲乙つけ難いが、若干の主観を許されれば、「頭部よりも足部が先に進む体位」という物理的観点からすれば、「死者が振り向きにくくなる」という後者のPotterの説の方が、やや説得性が高いようにも思える。

出棺時に特に関わりのある習慣に次のようなものがある。

* 「棺が霊柩車に載せられた後、会葬者が(馬)車に乗り込まぬうちに葬儀の当家のドアを閉めてはならない。さもないと、間もなくその家に死者が出る。」特にYorkshireでは、「馬車」が「自動車」に置き換わっただけで、今も大いに言われる伝承である。これについてE. & M. A. Radfordは、

… it [the door] has been “shut on the corpse” and another death will occur before many days are passed.⁵⁾

… それ〔ドア〕が『死者にくっついて閉じられた』ことになり、すぐに次の死者が出ることになる。

と説明している。C. Holeは、“On the funeral day, … it [the front door] must … stand wide open until the mourners return. (葬儀の日には、… それ〔玄関のドア〕は会葬者が戻るまでいっばいに開け放しておかねばならない)”⁶⁾と述べ、その理由として次のように続けている。

If it is closed, a second death will occur in the house very soon. Another reason sometimes given for leaving it open is that otherwise the soul will be shut in and will haunt the house.⁷⁾

もしそれが閉じられると、次の死者が出ることになる。それを開け放しておくための時折挙げられる別の理由は、そうしなければ、死者の魂が家に閉じ込められ、それが出沒することになるからである。

Holeはさらに続けてこう述べている。

In Lincolnshire it is said that the spirit may wish to return to his old home and must not find the door shut against him. It is possible that this idea springs not so much from kindly feeling towards the dead as from fear that the ghost will wail round the house seeking for entry.⁸⁾

リンカンシアで聞かれることだが、霊は自分の懐かしい家に戻りたがるものらしいので、その気持ちに逆らってドアを閉じておいてはいけなるとされる。どうやら、この考えは、死者に対する優しい気持ちからと言うよりも、霊が家の周りで入れてほしいと泣き叫ぶのではないかと、その恐怖からくるものようである。

これらを纏めたものが、*Reader's Digest* の次の記述である。

… either because another death might follow if this was not done, or because the soul might be imprisoned and therefore haunt the house.⁹⁾

… その理由は、もしこうしなければ次の死者が出るからか、あるいは、死者の魂が閉じ込められてしまい、そのため、それが霊となってその家に出没するかも知れないから、のいずれかであろう。

これに対して、J. H. Bloom は、W. シェイクスピアの活躍した十六世紀の風習を扱った著書の中で、上記の Radford や Hole 等の理由とは全く異なる理由を述べている。

… since you deserve such judgment for so soon forgetting those who have gone.¹⁰⁾

… その理由は、あなたが亡くなった者のことをこんなにも早々と忘れ去るのだと、そのような判断を下されるからである。

これらの理由を考察してみると、結局は、前述の三者の理由は「死者の霊への恐怖」という、人々の未知の世界への畏敬の念から出たものであり、一方 Bloom の理由は、やはり同様に「死者の霊への恐怖」も窺われるが、その上に「(現世に生きる人間の) 人情」が加味されたもの、と考えられるように思える。

尚、この「ドアを開けておく」という習慣に関して、他に次のような内容の類型も見られ、“If the doors of a house are closed during a funeral, and before all the mourners have returned, family quarrels will take place. (葬儀中に、また、すべての会葬者がまだ戻って来ないうちに家のドアを閉めると、その家では家族喧嘩が起きるもの)”¹¹⁾がある。

こうしてみると、「葬儀が始まってからそのすべてが終わるまで、ドアを閉めることは好ましくない」ということになるようである。

昔、馬に牽かせた霊柩車を使っていた頃には、次のような伝承があったとされる。

* 「霊柩車が出る前に、それを牽く馬が落ち着かなかつたり、あるいは出発を拒むのは、その家にまた死者が出る前兆である。」

その他、特に出棺後の習慣に次のようなものがある。

*「出棺後、棺が載せられていたテーブルとか椅子は、上下逆さまにしておくべきである。」一般に出棺前には、棺が家の前に用意されたテーブルや椅子の上に安置されるが、出棺後は、そのテーブルや椅子は逆さまにして相当長い間置いておかれるようである。これについては、「さもないと、一週間以内にその家に死者が出る」¹²⁾と言われる。

*「出棺後、玄関先の踏み石段、あるいは敷居等を洗う。」これは、特にイギリスの田園地方では現在でも見受けられる。この目的は、“… thus completing the story that perhaps began with carrying over the threshold. (… こうして、恐らくは敷居を跨いだことで始まった一巻の物語を終わらせる)”¹³⁾ ためとされる。尚、この習慣的行為は、葬儀がすべて済んでしまった後でなされることもある。

これに関連したものに、次のような一風変わった習慣がある。

*「葬式では、死者の友人たちが血を流すような喧嘩をするものである。」Opie & Tatem は *Folklore* の中で、十九世紀末のスコットランド高地地方の習慣を紹介している。

In the Highlands of Scotland it used to be customary for the friends of a deceased person to fight at the funeral till blood was drawn (the drawing of blood was essential).¹⁴⁾

スコットランド高地地方では、葬式で、死者の友人たちが血を流すまで喧嘩するのが常に習慣であった（血を流すことが肝要であった）。

これは、「死」によって生じた「不浄」を「血を流すことによって浄化する」という考えに基づくかつての習慣である。

因みに、葬儀終了後に見られる習慣に、

*「用いられた棺台は葬儀終了後に壊しておく。さもないと、また死者が出る」がある。

2 棺付き添い人 (pall-bearer)

死者の棺には付き添い人が付く。これには次のような習慣がある。

*「棺付き添い人は死者の友人・隣人で、人数は6・8・10・12人とされる。」この頃では、その人選等は葬儀屋任せになることが多く、またさほどこだわらなくなってきているようであるが、一応用意する員数は偶数とされる。

*「棺付き添いを依頼された場合は、これを断ってはいけない。かつてはこれを断るのは、故人や遺族に対する重大な侮辱と考えられた。」現在でもこの習慣は時として尊重され、その命脈を保っているようである。

*「棺付き添い人は、通例、黒の衣服を着用する。」ただし、「死者が子供であったり、未婚の男女の場合には、服装の一部—特に手袋、その他スカーフ・帽子リボン等—に白色のものを着用する」のが一般的である。（この衣服の「白」については、地域によっては、「未婚者の葬儀には、棺付き添い人は全身白装束を着ける」場合もあるとされる。）

* 「死者が子供の場合には、棺付き添い人には、大抵は同年配の子供たちが選ばれ、彼らは白の腕章・手袋・飾り帯を着用する。」こうした場合の「白」は、死者の「純真無垢」を象徴するものとされる。これに関して、Lorie の次の記述がある。

It was the custom in the 19th-century, in both Europe and the New World, for a white-sashed bearer to walk in front of a child's coffin bearing a white standard.¹⁵⁾

白い飾り帯を着けた旗手が、白い葬旗を持って子供の棺の前を歩くのは、ヨーロッパでもアメリカでもともに十九世紀の習慣であった。

今世紀に入ってもこの「白」の習慣は相当続いていたが、今では次第に消えていく傾向にあるようである。Kightly によると、「白着用の風習は1930年代までも続いていた」¹⁶⁾とされる。

* 「若い男・女の葬儀には、六人の白装束の若い女性が棺付き添い人を勤める。」(また、ところによっては、「若い女性の葬儀には、六人の白の手袋・帽子リボンをつけた若い男性がそれを勤める」こともある。)

John Brand の紹介している次の Sarah Wilson のバラッドには、そうした六人の白装束の乙女が登場する。

Six pretty maids, pray let me have, 六人の美しい乙女を、どうか私に与えよ、
To bear me to the silent grave; 私を沈黙の墓場へと運ぶべく。
All cloth'd in white, a comely show, 全身白づくめの、実に麗しき姿、
To bear me to the shades below.¹⁷⁾ 私を下界の黄泉の国へと運ぶべく。

(ここでの墓場に運ばれて行く「私」とは、「若い女性」とされている。)尚、前項やここでの「白」の習慣については、やはり、それが青年の「純真無垢」の美德を象徴するものと見做される。

* 「独身女性の葬儀の葬列の先頭では、一對の白手袋が、同年齢くらいの乙女によって運ばれる。」この手袋は、葬儀後、いかなる個人によっても保管を認められず、必ず教会で保管されるものとされる。

* 「評判の良かった独身の女性(男性を含むこともある)が死亡したとき、葬列の先頭では、乙女の花冠(maidens' garland)が二人の白装束の乙女によって運ばれる。」この花冠は生花・造花いずれもあるが、必ず白色の花で司教冠に似た形に作られ、儀式が行われている間は棺の上に置かれ、葬儀がすべて終わった後は教会に持ち帰られ、棺付き添い人たちの白手袋と一緒に所定の所に掛けておかれ、一定の期間を経た後奉納保存される。Hole は次のように記述している。

They [maidens' garlands] can still be seen in a number of churches, but the

custom itself seems to have died out, except at Abbots Ann in Hampshire. … they represent a challenge to anyone who throws doubt on the good character of the dead person.¹⁸⁾

それ〔乙女の花冠〕は、今でも多くの教会で見られ得る。しかし、その習慣自体は廃れてしまったようであるが、ハンプシアのアボッツ・アンでは例外である。…それは、死者の立派な人格に疑いを投げかけようとするいかなる人物に対しても、挑戦を表す。

The custom, with its stress on virginity and its crown representing the Virgin's Crown, is undoubtedly of pre-Reformation origin. It lingered on for a long time in Derbyshire … but Abbots Ann seems to be the only place where it is still kept up.¹⁹⁾

その純潔の強調と、その乙女の花冠を表す冠についての習慣は、明らかに宗教改革前に起源がある。その習慣は、ダービーシアでは長く続いていた。…しかし、アボット・アンは、その習慣が今でも維持されている唯一の地方のようである。

3 葬列行進への参加者（会葬者）

葬列行進とは、いわゆる「野辺送り」の意である。これには、歩行によるものと自動車等によるものがあるが、これに加わる人々については次のような習慣がある。

*かつては「葬列行進（また葬儀）に参加する者は、黒い服を着る」ことになっていた。しかし、田園地方でならともかくも、今日ではこの習慣は相当に変わってきており、特に米国では、黒い服の着用は極めて少なくなっている。

*「葬列行進（また葬儀）に参加する者は、新しい服を着てはいけない。また、遺族は特に新しい靴を履いてはいけない」と戒められていた。この理由は、次のように考えられるようである。

… all the dead envy the living. … It is dangerous to excite the envy of the newly dead.²⁰⁾

… すべての死者は生者を妬ましく思うものである。… 死亡したばかりの者の妬みを刺激するのは、危険なことである。

つまり、新しい衣服や履物等を身に着けている者は死者に羨ましがられ、それが高じると、その者が死出の旅に誘われる恐れがある、という理由である。

葬列は、教会の近くあるいは墓地入り口で、教区牧師が死者を出迎えて先導するまでは、一般に、教区吏員、葬旗旗手、棺付き添い人と棺、遺族・親族・縁者、友人、その後ろに一般の会葬者―男女の組み合わせで、しばしば腕を組んで一の順で編成される。また教区によっては、司祭が出棺時に死者の家まで出迎えに行くこともあり、さらに葬列行進は、十字架（持ち）、司祭、棺…の順で、また会葬者も男性が先で女性が後に続く、という編

成もある。(教区・宗派等によって葬列編成もいろいろのようである。)

*「一般の会葬者は、棺よりも後ろを進むべきであって、決して棺よりも前に出てはいけない。敢えてそれをする者は、急死あるいは大災厄を被る。」

また、古い時代には、妊婦や赤ん坊の安全のために次のようなことが言われた。

*「妊婦は胎児の安全のため、葬列その他いっさいの葬儀に参加してはならない。」

*「一歳未満の赤ん坊は、死の危険があるので、葬儀に連れて行ってはいけない。」

葬列に加わる者は、死者の埋葬時の必要物を用意しておく。(ただし、葬儀屋または関係者によって用意されることもある。)

*「かつては、マンネンロウ (rosemary) の花や、イトスギ (cypress), イチイ (yew) 等の小枝を携えて行き、埋葬時に棺の上に投げるのが仕来たりであった。」尚、これを家に持ち帰り、故人の思い出の品として保存するもよし、とされた。

マンネンロウは葬儀のみならず、婚儀にも用いられる花である。W. シェイクスピアの *Romeo and Juliet* で、ジュリエットの遺骸を前にして、その父親に語りかけるロレンス神父の言葉には、マンネンロウのこの両用性が窺われる。

… she's best marry'd, that dies marry'd young.

Dry up your tears, and stick your rosemary

On this fair corse; and, as the custom is,

In all her best array bear her to church : … ²¹⁾

… 結婚して若く死ぬ女、これぞ最良の結婚というもの。

涙を拭かれよ、そして、この美しい亡骸に

マンネンロウの花を手向けられよ。そして、世間の習慣通り、

晴れ着を着けたこのままで、教会へと運ばれよ。…

(因みに、「晴れ着を着けたこのままで」の解釈は、通説の「(新たに)晴れ着を着せて」の解釈と異なるが、これは、ジュリエットがこの仮死状態の時には、「既に花嫁衣装という最高の晴れ着を着ていた」と推断されるからである。この推断に至るには、寝室で彼女を呼び起こそうとしていた乳母の言葉もヒントになるであろうが、さらにそれ以上にヒントになるのは、「結婚後間もなくして死亡した女性は、特に花嫁衣装を着けて埋葬される」²²⁾という習慣である。特にこの後者のヒントから、既にロミオと密かに結婚していたジュリエットは、この策通りの仮死状態の時には、「まさに埋葬(葬儀)にふさわしい花嫁衣装の晴れ着姿であった」と推測される訳である。)

尚、マンネンロウの花言葉は『忘れないで』の意とされる。*Hamlet* のオフィーリアの言葉には、“There's rosemary, that's for remembrance; … (ほら、マンネンロウの花よ。忘れないで、という意味なのよ。…)”²³⁾が見出される。

イトスギは、“cypress coffin (イトスギ棺)”²⁴⁾という言葉によって示される通り、「かつては棺材としても利用された」²⁵⁾葬儀に縁の深い樹木である。

E.スペンサーに次の詩句がある。

The aspine good for staves; the cypresse funerall; …²⁶⁾
杖に適したポプラの樹，それに，葬儀に適したイトスギの樹。…

イチイもまた葬儀の樹である。Beaumont & Fletcher の *Maid's Tragedy* には，次のような表現が見出される。

Lay a garland on my hearse of the dismal yew; …²⁷⁾
私の霊柩車（棺）に，陰気なイチイの花冠を載せておくれ。…

また，シェイクスピアの *Twelfth Night* では，道化の歌の中にイトスギとイチイの両方が出てくる。

Come away, come away, death, And in sad cypress let me be laid ;
……
*My shroud of white, stuck all with yew, O, prepare it ; …*²⁸⁾
来たれ，来たれ，死よ，悲しいイトスギの中に，我を横たえよ。
……
我が白き経帷子^{きょうかたびら}，至る所にイチイの枝を刺し，ああ，それを用意しておくれ。…

これらの「不滅 (immortality) を象徴するイトスギやイチイ」²⁹⁾等の常緑樹の小枝の他に，大抵は花（前述のマンネンロウも花ではあるが）特に花輪が死者のために運ばれるものである。花輪は棺の上に置かれたり，埋葬後は墓に飾られる。かつては，「花は新生を象徴するもの故に，葬儀にそれを飾るのはふさわしくないと考えられた」³⁰⁾こともあり，また，「花は（1860年代頃までは）異教的なものとも考えられていた」³¹⁾ようである。しかしながら今日では，花は葬儀には欠かせないものになっている。

死者に花を供えることについては，Tad Treja が，Edwin D. Wolff の象徴説を踏まえてこう説明している。“… the actual grave goods were replaced by symbolic representations. (… 墓に実際に供えられていた物が，象徴的な代表物により置き換えられた。)”³²⁾つまり，幾分か補足を許されれば，花は，昔，死者に必要なだと想像された種々の供え物—例えば，飲食物，金銭，武具等—を，視覚的に美しい形で簡便に纏めて代表した物，ということになる。 (結局は，死者が花を供えられて喜ぶのかどうか肝心なことになるのかも知れないが) 死者に花を供えるようになった経緯の説明としては，説得性がやや高いように思われる。

その他，会葬者に関して次のような伝承がある。

* 「埋葬が済んで葬儀の当家に帰って来たとき，会葬者たちは，死者の近親者よりも先に家に入ってはいけない。それをする者は，急死あるいは大災厄を被る」と言われる。

4 葬列の通り道

*かつての田園地方には、「葬列の通る決まった道があり、必ずそこを通らねばならない」とされた。

… many of the paths leading from outlying hamlets to the mother church were called “church-ways,” “corpse-ways,” or burial-paths.³³⁾

… 辺鄙な村から母教会に通じる道の多くは、「教会の道」「死者の道」すなわち葬儀の道と呼ばれた。

To use any other route was unlucky, and was never done unless bad weather made the Corpse Way impassable.³⁴⁾

他のいかなる道を通ることも不吉なこととされ、悪天候のために「死者の道」が通行不能にならない限り、決してそのようなことはなされなかった。

*「死体が私有地を通過して運ばれると、そこは公道となる。」一般に、今日も言われる。

… a widespread but legally groundless belief held that if a coffin was carried across private land, its passage would automatically create a permanent right of way.³⁵⁾

… 一般的とはいえ、法的な根拠なく信じられていたことに、もし棺が私有地を通過して運ばれると、その道は自動的に永久の公道となる、があった。

Radford は今世紀初め頃の著書で、“This … is still firmly believed. (これは … 今でも固く信じられている)”³⁶⁾と記述している。因みに、Reader’s Digest には、「1948年にオックスフォード近隣で、溺死者の葬列に対し、地主が私有の有料橋を渡らせないと主張した事件があった」³⁷⁾との附記が見られる。

*「死者は、同じ道をもう一度通って運ばれてはならない。」いったん出棺しておきながら、出発点の家にもう一度戻るようなことは絶対にしてはならない、とされる。

*これと同じ考えから、「死体を載せた霊柩車は、決してUターンをしてはならない。これをすれば、その家にまた死者が出る恐れがある」と言われる。今日でも、こうした伝承は迷信だと承知しながらも、縁起を担ぐ人々が結構多いので、葬儀屋は特に気を遣う。

5 葬列行進と途中休憩

葬列は一般にゆっくりとした歩調で進み、教会（あるいは墓地）に向かう。現在でも田園地方では、歩行による葬送がおいおいにしてある。

*イギリスでは、「葬列は道の右側を進まねばならない」とされる。かつてイギリスの田舎での歩行による野辺送りの際には、人々はこの習慣にこだわったようである。

When a corpse is carried to church from any part of the town, the bearers take care to carry it so that the corps may be on their right hand, though

the way be nearer and it be less trouble to go on the other side ; ... ³⁸⁾
 町のどの地域からであろうと、遺体が教会に運ばれるときには、運び手は、一団が道の右側を通るように注意して運ぶ。喩え、もっと近い道があるとしても、また、左側を進むほうが面倒が少ないとしても、である。…

- * 「葬列行進中、遺体の前では、小さな鐘（鈴）が鳴らされる」ことがある。
- * 「葬列行進中に聖職者が同行している場合には、『詩編』を唱えることがある。」（これについては、一般的に、行進中には詩編第112編、教会に着いたときには第23編、墓地に向かう途中には第148編が唱えられる、とされる。）
- * 「葬列行進中、会葬者が死者のために賛美歌を歌うことがある。」

次はこの「賛美歌」を窺わせる、W. ワーズワスの *The Excurtion* からの一節である。

… when from out the heart
 Of that profound abyss a solemn voice,
 Or several voices in one solemn sound,
 Was heard ascending; mournful, deep, and slow
 The cadence, as of psalms — a funeral dirge ! ³⁹⁾

… あの深淵の心からの、
 厳かなる声が、あるいは、厳かなる音の中の、いくつかの声が、高まりきて聞こえたときに。悲しく、深い、そして低い声で、
 その韻律は、賛美歌の如く—これぞ葬送の歌なり！

* かつては、「霊柩車は、いったん出発したら途中で止まってはならないもの」とされた。そのため、門という門はことごとく開けておかれるように手配された。しかしながら特に今日の街中では、交通混雑等のため、この習慣も守られないことがよくある。

* 「霊柩車及び葬列は、交通混雑の中でも優先されるべきもの」と見做される。この習慣は、古来、人々が容認してきたものである。しかし、これも今日においては、種々の事情から必ずしもそうではなくなっているようである。

上述のように、一般に葬列行進は止まらずになされるものとされるが、例えば、教会（あるいは墓地）までの道のりが大きい場合やその他の事情のある場合、葬列、特に棺の運び手は途中での休憩を予定に入れておくこともある。

* 「棺を運ぶ途中での休憩は、『十字標 (cross)』⁴⁰⁾のある所等、昔から定められている場所に限られていた。」特に、かつての辺鄙な所での棺の運搬は大変な仕事であり、担ぎ手たちは出発前に十分な腹ごしらえをして出かけた、と言われる。

* 「休憩後の出発の際には、棺を担いで時計回り（右回り）に3度回ってから前進すべきである」とされた。

この「時計回り (clockwise; sunwise)」は、「太陽の見かけの運行と同方向」の意味である。原始の時代以来どの民族も太陽を神として崇拝してきており、太陽の東から西への動

き、その軌跡こそ「正しく善なるもの」と人々は信じたのである。Opie & Tatem は、“Corpse goes sunwise. (遺体は右回りをするもの)”を始め、この「右回りは縁起がよい」の考えに基づく他の種々の例—「船の旋回・花嫁の行進・食卓の用意・飲み物の回し送り・ロープの巻き等の右回り、右巻き」⁴¹⁾—を記述している。(因みに、ここで想起されるのが、世界のいずれの文化にも見られる「右利き」尊重の伝統である。(ここでは詳述は避けるが) 古来、人々が「左利きを不吉 (sinister)」と見做し、その理由の一つとして「左側には悪霊が立つ」⁴²⁾という確信から「左は不吉」と説明してきたが、その根底にはもしかすると、「聖なる太陽の軌跡、つまり右回り」への絶対的尊重という理由が潜んでおり、そこから「右利き」尊重の考え方が生じたのかも知れない、とも思われる。)

6 教会への到着・入庭

* 「葬列は、東側から教会に近づくようにすべき」とされる。これもやはり前項と同様に、「太陽の運行に逆らってはならない」という太古からの確信に由来し、そのためわざわざ迂回することもある、とさえ言われる。

* 「棺 (遺体) は教会の南門を通して運び込まなければならない。」これも太陽の運行に関する考え方によるものである。

7 墓地への入場

墓地に入るに当たっては、次のことが言われる。

* 「棺は“funeral stone (葬儀石)”を、右回りに三度回らねばならない。」これは、棺を墓地に運び込む前の戒めである。尚、この「葬儀石」は、墓地の入り口手前等の空き地に据えられてある。尚、地域によると、葬儀石以外にも、「教会の構内の十字架とか、教会の構内を右回りに三度 (あるいはそれ以上) 回る」という習慣もあるようである。これらの「右回り」についても、やはり前述の「太陽の軌跡」が関係している。また、「三度」については、多様な説のうちで有力なものの一つに、キリスト教の「三位一体説 (Trinity) — 神とキリストと聖霊の三者は一体であるとの説」から来る「三」の説がある。

次は [本稿の「はじめに」で触れた] かつての驚くべき出来事についてである。野辺送りの最後に近い段階で、死者を埋葬するため関係者一同が墓地に近づくとき、

* 「教会墓地の入り口付近で、二つの葬列が遭遇したとき、それぞれの会葬者は自分たちの死者を先に埋葬しようとして、墓地への入場順を争い、時には殴り合いの騒ぎまで起きた」とされる。これはかつて、特にアイルランドやスコットランド高地地方で、実際に見られた習慣である。

この争いの理由説明には、「墓守 (churchyard watcher)」に関する伝承を説明しなければならぬ。これについて Hole はこう記述している。

In many parts of Britain, and also in Brittany, it was believed that when a man was buried, he became the Watcher of the Churchyard until such time as he was relieved of his task by the interment of another corpse. A variant of this tradition was that he who was first buried in any year became the Watcher, and served in that capacity for twelve months after his funeral. Until that time had passed, or until he was released by the next burial, he could not go to his rest, and was compelled to guard the graves in the churchyard and to summon all those in the parish who were about to die.⁴³⁾ イギリスの多くの地域や、またブルターニュでも、人が埋葬されるとその墓守となり、それは、次の人が埋葬されてその職務から解放されるときまで続くもの、と信じられていた。この慣例の変わっているところは、いずれの年においても最初に埋葬された者が墓守となり、葬儀後一年間その立場で勤めをする、ということであった。その期間が過ぎるか、次の埋葬によって解放されるまでは、その者は安らぐこともできず、教会墓地の墓の番をしたり、教区の今にも死亡しそうなすべての者たちを召喚しなければならなかった。

そこで、それぞれの会葬者たちは、自分たちの運んで来た死者をこの「墓守」にしたいために、墓地の入り口でその入場順を互いに争ったのである。会葬者たちは、時によると「激しい殴り合い」等の暴力行為に至り、その間遺体は放置されたり、あるいは遺族たちが先を争って遺骸を運び込もうとした、とも言われる。こうしたことから、かつてのイギリスや、また北フランス等のヨーロッパでは、人々が、死者には「墓守」などにならないで安らかに眠ってもらいたい、と強く願った気持ちが窺われる。

Hazlitt は、十八世紀のスコットランドにおけるこの激しい感情に基づく習慣に関して、ある牧師の記述を紹介しており、それは、恐らくはドルーイド僧⁴⁴⁾の時代から受け継がれて来たものの一つであろう、と推測している。⁴⁵⁾ドルーイド僧からの継承という点については、彼らドルーイド僧が、古代ゴール族・ケルト族であり、その生活活動範囲がヨーロッパに相当広く及んでいたことや、また彼らに超自然的な神秘性への畏敬尊崇の特異な性質があったこと等を、この「墓守」という恐怖に満ちた確信と考え併せてみると、両者が結びつく可能性が大いにあるように思える。

8 葬列行進の付随事項

*「死体が通った畑は不毛の地となる。」これは、死体の魔力がその通過した場所を汚す結果であるとされ、田園地方では特に根強い伝承として、今も幾分か残っている。

次の伝承も、同様の考え方によるものと見做せるであろう。

*「船に死体を載せていることは縁起が悪い」とされる。Lorie は、“… they [corpses aboard ships] will bring either bad weather or bad fortune. Many a disaster at sea has been confirmed by the previous death of a member of the crew. (それ [船上の死体] は、悪

天候か不運のいずれかをもたらすものとなる。海での多くの災厄は、これまで、以前の乗組員の死によって確証されている)”⁴⁶⁾と記している。

次の引用は、シェイクスピアの *Pericles* における、大嵐の海での船上の場面である。

2. *Sail.* But sea-room, and the brine and cloudy billow kiss the moon, I care not.

1. *Sail.* Sir, your queen must over-board; the sea works high, the wind is loud, and will not lie till the ship be clear'd of the dead.

Per. That's your superstition.

1. *Sail.* Pardon us, sir; with us at sea it hath been still observed; and we are strong in eastern. Therefore briefly yield her; for she must over-board straight.

Per. As you think meet. — Most wretched queen! ⁴⁷⁾

水夫 2. 「だが、船は何とかなろうて。それに、大潮波や、雲みてえなでかい大うねりが、お月さんの顔にかかろうと、構うこたあねえさ。」

水夫 1. 「王様、お后様の亡骸を海に葬っていただかねばなりませんめえ。船に屍体が載ってる限り、この海の大荒れも、風の叫び声も、治まりゃしますめえ。」

ペリクリーズ 「そんなことは迷信じゃ。」

水夫 1. 「お言葉を返すようでござえますが、王様、私ども船乗りゃあ、今でもそいつを守っております。固く信じております。じゃから、すぐにこちらにお渡し下せえ。お后さまを、すぐに海に降ろさになりませぬから。」

ペリクリーズ 「善きに計らうがよい。—この上なく哀れな后よ！」

これは、「遺体は汚す」という伝承のまさにその具体例である。因みに、海上での葬儀「水葬の儀」では、かつて一部には、小舟に遺体を載せて流すか沈める方法もあったようであるが、一般には、滑り台様の台に載せた棺あるいは遺体そのものを、やはり「足部から先に」海に滑り落として葬る。

次は天候に絡んだ伝承である。

* 「葬列行進中に雨が降るのは、死者が祝福されている証拠である」と言われる。生憎の雨も、それが天(=神)の露であると見做せば、「雨が降り注ぐ亡骸は殊に神の恵みを受けている」⁴⁸⁾と解釈でき、関係者一同にとっては実に有り難い話であろう。

尚、この「雨」については、行進中のみならず、埋葬時にも一広く言えば「葬儀のどの段階であろうとも—それは死者の魂の幸福を予告するもの」⁴⁹⁾なのである。(因みに、一般に諺で、「太陽の降り注ぐ花嫁と、雨の降り注ぐ遺体は幸せである」⁵⁰⁾と言うようであるが、イギリスの一部の地域では雨降りの結婚式を好ましいものとし、「雨の降り注ぐ花嫁は幸せである」⁵¹⁾とも言うようである。)

9 葬列の目撃・葬列との遭遇

葬列の目撃については、次のような古くからの俗信がある。

*「窓越しに葬列を見守ってはいけない。それをすると、災厄を被るであろう。」

*「葬列の乗り物は数えるものではない。その行為は大惨事を招くことになる。」

これらの俗信は、古来、今もって時として聞かれるものであるが、P. F. Waterman は、こうした伝承の根強さの理由を暗示している。

The peril that lurks in the practice of watching a funeral cortège (and, by that same token, in counting its vehicles) lies in the fact that the ghost of the departed is likely to entice one's soul away.⁵²⁾

葬列を実際に見守る行為（及び、同様に、その乗り物を数える行為）に隠されている危険な点は、死者の霊が人の魂を誘って連れて行きがちである、ということにある。

次は、葬列に遭遇した場合についてである。

*かつては「葬列が進むとき、それに最初に出くわす人とか、あるいはその出くわした人と同性の人が、その教区の次の死者になる」と言われた。今や廃れたこの俗信は、かつては地域によっても、その内容に違いが見られたようである。

Derbyshire people say that only the first person to meet a funeral after it has started on its way is marked for death; in Lincolnshire, it is not necessarily the individual himself or herself who will die, but someone of the same sex.⁵³⁾

ダービーシアの人々は、葬列に出くわす最初の人こそが次の死者と目される、と言う。リンカンシアでは、死ぬことになるのは必ずしもその出くわした人自身ではなく、その人と同性の人なのである。

*「葬列に真正面から出会うのは、一般に不吉とされる。」こうなった場合には、その凶兆逃れがなされる。次は、イングランドとスコットランドとの境界地方の習慣である。

He who meets a funeral is certain soon to die unless he bares his head, turns and accompanies the procession some way. If the coffin is carried by bearers he must take a "lift." That done, he should bow to the company, turn and go on his way without fear.⁵⁴⁾

葬式に出会う者は、きっと間もなく死ぬことになる。ただし、彼が、帽子を脱いで、向きを変え、その葬列に加わって少し進むならば別である。もしも棺が担いで運ばれていれば、彼はそれをちょっと「担が」ねばならない。そうした後で、会葬者たちに挨拶をし、向きを変え、安心して自分の道を行くことができよう。

また、リンカンシア辺りでは次のようにも言われている。

… but the omen may be averted by stopping and allowing the procession to pass or, better still, by turning to follow it for a step or two.⁵⁵⁾

… しかしながら、その凶兆は回避され得る。それは、その場に立ち止まり、葬列が通り過ぎるのを待つか、あるいはもっと良い対策は、自分が向きを変えて葬列について数歩進む方法である。

ここで、先述の「脱帽」行為について、その理由を考えてみたい。伝統的な理由としては、Brand や Hazlitt が紹介している Grose の次の説がある。

… this [taking off your hat] keeps all evil spirits attending the body in good humour, …⁵⁶⁾

… このこと〔脱帽〕は遺体に随行しているすべての悪霊を上機嫌にしておくからである。…

つまり、この説によれば、脱帽は、亡骸にくっついて悪霊たちのご機嫌を損ねないための行為なのである。かつての多くの人々は、今で言う超自然的な力に絶対的とも言えるような畏敬の念を抱いていたので、こうした考え方が生じたのであろう。

しかしながら、この考え方には「死者への敬意と祝福」という考えが欠けているのではないだろうか。つまり、「死者がこの世で苦勞して懸命に生きたことへの敬意と、今やっと静かな安らぎを得ようとしていることへの一種の祝福の念」からも、人々が「脱帽する」という考えが含まれるべきであろう、と思われる。

* 「アメリカ南部の黒人は、葬列に出くわすと顔を背ける」という、やや徹底した敬遠行為をするようである。

Southern Negroes, in such a case, turn right about face and look steadily in the direction in which the procession is going. If they are in an automobile, they will stop the car and turn completely about in their seats until the funeral party has passed.⁵⁷⁾

南部の黒人は、そのような場合、さっと顔を背けて、葬列が進んでいる方角をじっと見る。もし彼らが車に乗っているならば、車を止めて座席に座ったままで、葬列が通り過ぎるまで全くもって顔を背けておく。

葬列に出くわすことは一般に不吉とされるが、特に新婚者に関してはこう言われる。

* 「新婚者にとっては、葬式はこの上なく不吉である。」

Should the happy pair travel with a corpse with or without their knowledge, the death of one of them would be sure to result in a short time./… a funeral crossing the path is a sign of death to the bride or bridegroom.⁵⁸⁾

万一新婚夫婦が、知っていようが知るまいが、遺体と一緒に旅をすれば〔道を進めば〕夫婦の一方はきっと間もなく死亡するであろう。/… 葬式がその行く手を横切れば、花嫁か花婿かが死亡する前触れである。

当引用の筆者 Bloom はこれについて、“… the garb of woe and the presence of the dead are not fit companions for newly-wedded bliss. (… 悲しみの身なりである喪服と死者の存在とは、新婚者の至福とは反りが合わない)”⁵⁹⁾と述べ、「悲」と「喜」とは異質のものであって融和しない、と僅かながらその理由にも触れている。

一般に、葬列に出くわしたときその凶兆から逃れるには、Bloom が述べているように、“… it can be avoided by turning one’s back on the funeral cortège. (… それは、葬列に背を向けることによって避けられ得る)”⁶⁰⁾と考えられているようである。

*「葬列を追い越すと身に不幸を招くことになる」と言われる。この理由は、“… the overtakers will then be hurrying towards their own deaths : … (… 葬列を追い越す者は、そのとき自分自身の死に向かって急いでいることになる。…)”⁶¹⁾からとされる。つまり、死者よりも先に行(逝)きたがるのは自ら死に急ぐようなもの、という訳である。

*「葬列を分断して通ってはならない。自動車の葬列の場合も同様である。」これについては、昔から、葬列に出くわしたときには「道を譲る」という習慣が一般的である。

その他、(この章の終わりにあたって) 因みに、風変わりな「いぼ治療」に関する次のような俗信⁶²⁾を附記しておく。

*「近親者でも縁者でもない死者の葬列がやって来たら、石を拾って、父と子と聖霊の名において棺の後からそれを投げつける。それから、『いぼを～さん [死者の名] に押しつける』と言えよ。」

*「葬列が目の前を通り過ぎるとき、いぼを擦り、『このいぼとこの亡骸が行ってしまっ、二度と戻って来ませんように』と三回繰り返せばよい。」これらは、大抵アイルランド辺りのいわゆる「呪い」であるが、これらの類型は英米ともに広く見られるようである。結局はいずれのものも、「いぼを死体を持って行ってもらおう」という手前勝手な考え方に基づく俗信である。

10 教会ミサ

棺が祭壇の前に置かれ、死者のための「ミサ (requiem mass)」が行なわれる。このとき、葬式の鐘—概して鐘の「舌」を布で包んで鳴らす—が静かに鳴らされる。棺は一般に花で飾られ祭壇の前に据えられるが、通常、棺の足部が祭壇の方に向けて置かれる。遺族は最前列に着席する。会葬者は、オルガンで葬送の曲が演奏される間に着席する。

*「会葬者は、遺族よりも先に教会に入ってはならない。さもないと、会葬者に死者が出る」と言われる。

棺の蓋は開けておかれるが、それを閉じて上に写真を置いてある場合は、戦死者とか遭難あるいは重病による死者の場合で、遺骸がないときや、その損傷あるいはやつれ等が酷い場合である。

牧師が聖書の句『裸にて母の腹より生まれ、裸にて土に還る(ヨブ記)』⁶³⁾から始まって、

『我が父の家には住居多し(ヨハネ伝)』⁶⁴⁾へと読み進む。これによって死者が「神によって召された」ことを告げ、特に悲しみに沈む遺族その他の関係者に希望を与える。会葬者全員で賛美歌“Nearer, my God, to Thee (主よ、御許に近づかむ)”等を歌う。牧師が簡単に故人の履歴を読み上げる。次いで、故人の愛唱した歌あるいは賛美歌の独唱があり、祈禱がなされ、式は比較的短時間で終わりになる。

教会の式では、弔辞を読みあげることもしないし、遺族の挨拶等もなされない。尚、香典を供えるとか、そのお返しをする習慣もない。(ただし、アメリカ合衆国の現代的習慣である葬儀堂利用の場合に、時としてその受付等で極めて少額の金銭を差し出す者がある場合、それを受け付けたりもするが、そのお返し等は一切しない。)

その後、牧師が棺の側に立ち、遺族から順にすべての会葬者が故人との最後の別れをし、棺の蓋が閉じられる。

*「ミサの後で、会葬者は棺の前を通り、必ず死者の顔を覗き込むもの」とされる。この死者への敬意の証たる行為を行わなければ、極めて無作法とされる。

こうしてミサを終え、死者は墓地へと運ばれる。かつてはいずれの教区でも、このときまた葬送の鐘が鳴らされ、その音は静かにもの悲しく、また優しく、人々の心に響いたものであった、と言われる。

[次号「埋葬・服喪」に続く。]

Notes <膨大化回避のため、*印52項の各提示文への付注は原則として割愛する。>

- 1) “Churchyard Watcher,” *E. & M. A. Radford Encyclopaedia of Superstitions* ed. and rev. Christina Hole (1948; London: Hutchinson, 1961) 101.
- 2) Peter Lorie, *Superstitions* (New York: Simon, 1992) 248.
- 3) Charles Kightly ed., *The Customs and Ceremonies of Britain* (London: Thames and Hudson, 1986) 119 (R).
- 4) Charles Francis Potter, “Funeral Customs and Belief,” *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend*, ed. Maria Leach & Jerome Fried (1949; New York: Funk, 1972) 428 (L).
- 5) “Funeral,” *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M.A.Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1969) 128 (L).
- 6) “Front Door,” *E. & M.A.Radford Encyclopaedia*, Hole, 169.
- 7) “Front Door,” *E. & M.A.Radford Encyclopaedia*, Hole, 169.
- 8) “Front Door,” *E. & M.A.Radford Encyclopaedia*, Hole, 169.
- 9) Reader’s Digest Association ed., *Folklore, Myths and Legends of Britain*, 2nd ed. (London: Reader’s Digest Assn., 1977) 91 (R).
- 10) J. Harvey Bloom, *Folk Lore, Old Customs and Superstitions in Shakespeare Land* (London: Mitchell Hughes and Clarke, 1929) 43.
- 11) “Funeral,” *Encyclopaedia of Superstitions*, E. & M.A.Radford, 128 (L).
- 12) “Coffin Supports Turned Over,” *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem

- (1989; Oxford: Oxford UP, 1990) 92 (L).
- 13) Lorie, 248.
 - 14) "Blood, Shedding: at Funeral," Opie & Tatem, 32 (L).
 - 15) Lorie, 242 (R).
 - 16) Kightly, 119 (L)-(R).
 - 17) John Brand, *Observations on the Popular Antiquities of Great Britain*, vol.2 (1848-9, London; New York: AMS, 1970) 255, 3 vols.
 - 18) Christina Hole, *English Custom & Usage* (1941-2; London: B. T. Batsford, 1990) 109-10.
 - 19) Hole, *English Custom*, 110.
 - 20) Potter, "Funeral Customs and beliefs," *Funk & Wagnalls*, 428 (L).
 - 21) William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, iv. 5, Malone's Shakespeare, ed., Edmond Malone, vol. 9 (London: 1790; New York: AMS, 1968) 149, 10 vols.
 - 22) "Burial Preparations," *E. & M.A. Radford Encyclopaedia*, Hole, 74.
Brides who died soon after the wedding were frequently buried in their braidal dress.
 - 23) Shakespeare, *Hamlet*, iv. 5, Malone, vol. 9, 368.
 - 24) "Cypress," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobes, part 1 (New York: Scarecrow, 1962) 402, 3 parts.
 - 25) "Cypress," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp. (1870; London: Cassell, 1978) 294.
 - 26) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, I. I. VIII. 9, *The Works of Edmund Spenser*, ed. Henry John Todd, vol. 8 (London, 1805; New York: AMS, 1973) 14, 8 vols.
 - 27) Beaumont & Fletcher, *The Maid's Tragedy*, II. 1, *The Works of Beaumont & Fletcher*, ed. Alexander Dyce, vol. 1 (1843-6; Freeport, NY: Books For Lib., 1970) 345, 11 vols.
 - 28) Shakespeare, *Twelfth Night*, ii. 4, Malone, vol. 4, 46.
 - 29) "Cypress," "Yew," Jobes, part 1, 402; part 2, 1706.
 - 30) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 33.
 - 31) Kightly, 120 (R).
 - 32) Tuleja, 33.
 - 33) Bloom, 48.
 - 34) Reader's Digest Assn., 91 (R).
 - 35) Kightly, 120 (L).
 - 36) "Funeral," *Encyclopaedia of Superstitions*, E. & M. A. Radford, 128 (L).
 - 37) Reader's Digest Assn., 91 (R).
In 1948, permission was refused to the police to carry a drowned man over the toll-bridge at Iffley Lock near Oxford. The owners claimed that the passage of the corpse would automatically destroy the toll rights. It was sometimes said that the undertaker could overcome the difficulty by sticking pins into every gate or stile on the way, or by persuading the landowner to accept a small fee. Nevertheless, fights sometimes broke out between funeral parties and landowners' servants, the former struggling to reach the church by the shortest route and the latter striving to protect their masters' property.
 - 38) W. Carew Hazlitt ed., *Faiths and Folklore of British Isles*, vol. 1 (1905; New York: Benjamin Blom, 1965) 249 (R), 2 vols, 3rd rev. of *The Popular Antiquities of Great Britain*, orig. comp. John Brand (London, 1813).
 - 39) William Wordsworth, *The Excursion*, II. 372-6, *Wordsworth Poetical Works*, ed. Thomas Hutchinson, rev. Ernest de Selincourt (1904; Oxford: Oxford UP, 1971) 607.
 - 40) "Cross," OED (1970).

A monument in the form of a cross, or having a cross upon it, erected in places of resort, at crossways, etc., for devotional purposes, ...

- 41) "Sunwise, Boat Goes," "Sunwise, Bride Goes," "Sunwise, Laying Table," "Sunwise, Passing Drink," and "Sunwise, Rope Coiled," Opie & Tatem, 384-5.
- 42) James Kirkup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo: Asahi, 1975) 2.
 In olden times, it was believed that evil spirits stood on our left side, and good spirits on our right.
- 43) "Churchyard Watcher," *E. & M. A. Radford Encyclopaedia*, Hole, 101.
- 44) "Druid," *The New Encyclopaedia Britannica* (1988).
 ... member of the learned class among the ancient Celts. They seem to have frequented oak forests and acted as priests, teachers, and judges. The earliest known records of the Druids come from the 3rd century BC. ... The Druids' principal doctrine was that the soul was immortal and passed at death from one person into another. ... The Druids were suppressed in Gaul by the Romans under Tiberius (reigned AD 14-37) and probably in Britain a little later. In Ireland they lost their priestly functions after the coming of Christianity and survived as poets, historians, and judges.
- 45) Hazlitt, vol. 1, 254-5.
 The minister of Kilsinichen and Kilviceven, co. Argyll, writing in the 18th century, says: The inhabitants "are by no means superstitious, yet they still retain some opinions handed down by their ancestors, perhaps from the time of the Druids. It is believed by them that the spirit of the last person that was buried watches round the churchyard till another is buried, to whom he delivers his charge." ... "in one division of this county, where it was believed that the ghost of the person last buried kept the gate of the church yard till relieved by the next victim of death, a singular scene occurred, when two burials were to take place in one church yard on the same day. Both parties staggered forward as fast as possible to consign their respective friend in the first place to the dust. If they met at the gate, the dead were thrown down till the living decided by blows whose ghost should be condemned to porter it." (*Stat. Acc. of Scotland*, iv. 210 & xxi. 144.)
- 46) Lorie, 248.
- 47) Shakespeare, *Pericles*, iii. 1, Malone, vol. 3, 551.
- 48) "Corpse," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Schuster, 1989) 95.
- 49) Reader's Digest Assn., 91 (R).
- 50) F. P. Wilson ed. & rev., *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, 3rd ed. (1935; Oxford: Clarendon, 1992) 85 (R).
 Happy is the bride the sun shines on, and the corpse the rain rains on.
- 51) Kircup, 26.
 ... in certain parts of Britain, notably in Hampshire, Derbyshire and Lincolnshire, they [the people] prefer a rainy wedding day, and quote the superstitious saying: "Lucky the bride the rain rains on."
- 52) Philip F. Waterman, *The Story of Superstition* (1929; New York: AMS, 1970) 111-2.
- 53) "Burial Omens," *E. & M.A. Radford Encyclopaedia*, Hole, 72.
- 54) "Funeral," *Encyclopaedia of Superstitions*, E. & M.A. Radford, 128 (L).
- 55) Kightly, 120 (L).
- 56) John Brand, vol. 2, 250. / Hazlitt, vol. 1, 251 (L).
- 57) Potter, "Funeral Customs and beliefs," *Funk & Wagnalls*, 428 (L).

- 58) Bloom, 43 & 46.
- 59) Bloom, 43.
- 60) Bloom, 46.
- 61) Kightly, 120 (L).
- 62) "Warts 'Given' to Corpse," Opie & Tatem, 423 (R).
- 63) "The Book of Iob," I. 21, *The Holy Bible*, An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version (A. V., 1611; Oxford: Oxford UP, 1985).
Naked came I out of my mothers wombe, and naked shall I returne thither: the LORD gave, and the LORD hath taken away, blessed be the Name of the LORD.
- 64) "The Gospel according to S. Iohn," XIII. 2, *The Holy Bible*.
In my Fathers house are many mansions; if it were not so, I would have told you: I goe to prepare a place for you.

Speculation concerning Superstitions
in the Cultural Background
of the English & the Americans — (4)

II DEATH Part 3 : On the Customs and Superstitions
from the start of a funeral procession to church mass

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1995)

No man can avoid death. Once he dies, the people around him usually try to give as cordial a ceremony as possible, hoping that he will surely live a better life on the other side. It is certain that people have made every effort since time immemorial, to give him a happy rest in paradise.

Concerning this effort, a curious incident in 18th-century Scotland is reported: according to a minister's record, two funeral processions happened to meet each other just in front of the lich-gate. Suddenly, the two parties began a fist fight, striving to be the first to pass the gate into the churchyard. Both parties wished their own dead would not become a churchyard watcher, who was doomed to be compelled to guard the graves there and to summon all those in the parish who were about to die. This violent behavior by the people may be regarded as one of those examples in which people expect their dead to be happy in a future world.

In this survey, I would like to examine a variety of *Superstitions* seen in a series of events from the start of a funeral procession to church mass, including the manners and customs of particular cultures.